落窪の君と阿漕の成長・出世譚としての『落窪物語』

井上　真梨子

『落窪物語』は、一般的に継子いじめ譚として位置づけられているが、この物語においては「継子いじめ」は物語の一部分でしかない。「継子いじめ」の後に「復讐」「孝養」と話が続き、三つの構成で物語が成り立っているからである。そこで本稿では、この「復讐」「孝養」部分にも着目することで、『落窪物語』に従来の継子いじめ譚以上の意味付けをしていきたいと考え、考察していく。

まずはじめに、継子である落窪の君にとって、「継子いじめ」「復讐」「孝養」が、それぞれどのような意味を持つのか探り、ここから落窪の君の試練の構図を考えていく。次に、落窪の君の側で活躍する女房・阿漕の位置付けについて考えていきたい。「継子いじめ」の際に、落窪の君の唯一の味方として援助を行うのが、この阿漕なのだが、物語が進むにつれて落窪の君との距離感が変化していくことがわかる。そこで、このような変化がなぜ生じたのか、乳母子と女童の相違から考察していく。さらにここから、物語全体の構図がどのようなものになっているのかを考えていきたい。

一　落窪の君をめぐる試練の構図

（一）落窪の君の変化

主人公である落窪の君は、物語において一貫して心優しい女性として描かれる。継母から辛い仕打ちを受けても恨みに思わず、道頼の復讐を知ると、継母や中納言家の負担・悲嘆を思いやり、心を痛める描写がされる。そして、そのような状況において、落窪の君は、自らの力では状況を変えられないことがわかる。「継子いじめ」においては、継母の絶対的な力に逆らうことができず、「復讐」においては、道頼に言いくるめられる様子が描かれるからである。

しかし、それとは対照的に、「孝養」に入ると、道頼の妻として積極的に家を切り盛りする様子が描かれるようになる。ここでは落窪の君自身が機転を利かせ、状況を展開させていくのである。

『落窪物語』では、「継子いじめ」は中納言邸、「復讐」では二条邸、「孝養」に入ると三条邸というように、物語が進むにつれて落窪の君が住む邸が変わっていくことがわかる。このように邸

を移り住むことが、落窪の君の変化とも関わりがあるのだと考えられる。

また、この邸はそれぞれ、継母が力を振るう邸（中納言邸）、夫である道頼の母が所有する邸（二条邸）、実母から譲り受け、自身も母として生活する邸（三条邸）である事が記述されている。ここから、「邸」と母に、どのような関わりがあるのか注目していきたい。

日本では、九世紀頃から家父長制家族が成立し、浸透していった。これは「家」とも称され、家筋の血縁や家の格の象徴である。これによって、子は父系の「家」に属すものとなり、一般的に母親の氏を継承することはなくなった。

そのため、子に対する社会関係は夫方が強くなったが、実際は妻方の親族も、外戚として子に密接に関わったようである。このように、妻方の親族の援助によって、夫方の「家」の勢力は強くなっていった。そして、この「家」が強くなれば、繋がりを持つ妻方の「家」も、それだけ強力なものになったのである。

また、当時の結婚形態は妻方居住婚というもので、これは、結婚当初に夫が妻の邸か妻の両親が提供した邸に住む形態であった。前述したとおり、妻方の親族は、夫方の「家」を強化するために援助を行うので、妻方居住もこの一貫であったと考えられる。したがって、妻方が提供した邸には、このような援助の姿勢が込められているのである。つまり「邸」は、妻方の実家による援助の象徴であると考えられる。

このように、「家」は夫方の家柄、家の格を象徴するもの、「邸」はこの「家」の強化のために、妻方の実家が援助を行う姿勢を象徴したものとして、それぞれ位置付けられるのである。(1)

「家」が成立するにつれて、この「家」を切り盛りする能力が妻に求められるようになった。十一世紀中頃に成立した『新猿楽記』には、三人の妻についての記述があるが、その中で、夫と同年の「次の妻」が理想の妻として描かれる。

この妻は、これといった欠点がなく、心が和やかであることが記される。また、裁縫や官吏の才幹、家内の切り盛りに関しても言うことなしで、装束も従者もすべて、この「次の妻」の配慮によって整えられている。

ここから、妻には衣料を作製する能力や、家をよく治めるといった実務的な能力が求められていたことがわかる。「家」が成立すると、家政全般の切り盛りが女性の役割となっていったのである。

落窪の君も、物語の冒頭から裁縫の能力を持つことが強調される（「いとをかしげにひねり縫ひたまひければ」一九頁(2)）。そして、この裁縫の能力は、中納言家の三の君・四の君とも対比されている。

「復讐」において、夫である蔵人少将が三の君のもとから離れる様子が描かれるが、この理由として、中納言家で用意される衣服の出来の悪さが挙げられる。蔵人少将は、「継子いじめ」にお

いては落窪の君が縫った衣服を着ており、「この装束ども、いとよし。よく縫ひおほせたり」（二七頁）と満足する様子が描かれている。一方、落窪の君が中納言邸を去った後は、「「よし」と誉めし装束も、すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとどことをつけて、腹を立ちて」（一六八頁）と、これをめぐって三の君と口論する。このように、三の君の結婚は、落窪の君の裁縫の能力があってこそ成り立っていたことがわかる。

また、四の君は、再婚をした際に夫である権帥に筑紫赴任の準備を任せられるが、「絹どもあめれど、いかがはしはべらむ。」（三一九頁）と、当惑する様子が描かれる。ここでは裁縫の上手な落窪の君に対し、このような能力のない四の君が、対照的に描かれている。

更に、「孝養」においては、落窪の君が積極的に家の切り盛りに関わり、父である忠頼のための算賀法華八講を催す際の様子は、「経書かせ、仏師よばせて、「仏きよらなるべく」と、男君、女君心に入れたまへり。国々、絹、糸、白銀、黄金など召す」（二五六頁）と描かれる。この賀の法要中に、道頼の母から落窪の君に「『いそぎたまふことあり』とは、うけたまはりしかど、のたまふこともなかりしかば、もろ心なるさまも人見たまはずやありけむ。」（二六三頁）と手紙が届くことからも、落窪の君が中心となり、賀の準備を進めていたことがうかがえる。

また、女房の阿漕が、夫である帯刀と共に三河国へ下る場面でも、落窪の君が必要となる品物を用意したことが記述され、機転の利く妻として力を発揮する様子が描かれていることがわかる。

（二）「中納言邸」における試練

落窪の君は、「孝養」において家の切り盛りに関わっていくが、このような活躍に至るまでには、どのような過程があったのだろうか。物語が進むにつれて、舞台となる「邸」が変わっていくことは前述したとおりであるが、それぞれの「邸」に住むことが、落窪の君にとってどのような意味を持つのか考えていきたい。

まず、「継子いじめ」の舞台となるのは「中納言邸」である。落窪の君は、この「邸」で床の落ち窪んだ劣悪な部屋をあてがわれていたことがわかる。また、継母によるいじめだけではなく、女房からも蔑まれ、父である忠頼も「かかりける仏（落窪の君）を、少しにてもおろかなりけむは」（二八一頁）と、後に回想する記述がある。ここから「中納言邸」における落窪の君の立場の弱さがうかがえる。

このように、落窪の君にとって「中納言邸」での暮らしは逆境の期間であるが、実際には危機は全て女童・阿漕の機転によって乗り越えられていく。よって、「継子いじめ」において落窪の君自身が果たしていく試練は、継母によって与えられる裁縫仕事をこなすことに尽きるのである。そして、これによって、妻にとっての必要条件である実務的な能力を身につけられたのだと考えら

れる。

（三）「二条邸」時代の試練

「復讐」が行われる際に落窪の君が暮らしている邸が「二条邸」である。ここは道頼の母が所有する「邸」であることが記されている（「この二条殿は、北の方の御殿なり。」一六七頁）。

「復讐」では、道頼の「中納言家」に対する復讐が描かれるが、落窪の君はこれに関与せず、一見目立たない存在になっている。しかし、落窪の君に注目して「復讐」部分を見ると、次々と行われる復讐の裏で、着々と道頼の母から与えられる試練（道頼の妻として承認されるための試練）をこなしていく様子が見えてくる。

〔試練1　手紙のやりとり〕

道頼の母が贈り物をしたことから、二人の手紙のやり取りが始まる。北の方は落窪の君の手紙を見て「この人よげにものしたまふめり。御文書き、手つき、いとをかしかめり。」（一四九頁）と評価する。

〔試練2　春の装束の用意〕

道頼の母から、新年の準備として道頼の春の装束を作るようにと、絹や糸、染料が送られる。これを受け、落窪の君がすぐに装束作りに取り組む様子が記される。

新年を迎え、道頼の着る装束が道頼の母の目に入る。道頼の母は、その立派な出来栄えに「あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそものしたまひけれ。（中略）針目などの、いと思ふやうにあり」（一六八頁）と絶賛する。

〔試練3　露顕の装束作り〕

道頼の妹・中の君の結婚の際、道頼の母は、落窪の君に三日夜の露顕の際の装束作りを依頼する。ここでもすぐに装束作りに取りかかる落窪の君が描かれ、その出来上がりに道頼の母が満足し、喜ぶ記述がされる（「いと清げに縫ひ重ねて奉らせたまへれば、大殿の北の方、限りなく喜びたまひて」一八〇頁）。

〔試練4　対面〕

賀茂祭が催される際、落窪の君は、道頼の母から見物の誘いを受ける。これによって二人が対面することになり、道頼の母は「見たまふに、わが御女、姫君にもおとらず、をかしげにて見ゆ。」（一九七頁）と、落窪の君に好印象を持つことがわかる。

このように「復讐」では、落窪の君が段階を踏んで道頼の母との関係を築いていく様子が読み取れる。そうして、賀茂祭の見物後、落窪の君は道頼の母から「大将邸（道頼の両親が住む邸）」へと招待される。落窪の君は、丁重な待遇を受け四五日の間滞在し、道頼の母も、落窪の君のことを以前にも増してかわいいと思うことが記述される（「まして、対面したまひて後は、あはれなるものに思ひきこえたまへり。」一九八頁）。ここでは、「大将邸」

における落窪の君の部屋が寝殿の西の対に設置されるが、これは道頼の妻としての待遇を意味するものである。つまり、落窪の君は「大将邸」に招待されたことで、道頼の母から正式に妻として承認されたのである。

これらの試練をひと通り終えたところで、落窪の君は、道頼の自分への愛情は変わらないだろうと確信を持つに至るが（「〈君の御心は今は〉と見たまひてければ」一九九頁）、これは、道頼の母の承認が関係しているとも考えられる。また、こうした試練の後に落窪の君が太郎君、次郎君を続けて出産し、これによって妻としての立場が、さらに確立されてゆくのがわかる。

このように、落窪の君は継母や道頼の母による試練を経たことで、妻として理想的な能力を持つ女性であることが明確になる。しかし、当時の結婚形態は、妻方の「家」から夫方の「家」へ援助を行うものであった。したがって、「理想的な妻」たり得るには、本人の能力だけではなく、実家からのバックアップも必要な条件であったことがわかる。つまり、この時点で落窪の君を「理想的な妻」と位置づけるには、実家との結びつき・援助という点が不足しているのである。

この後「孝養」では、実母から継承した「三条邸」を舞台に、落窪の君が妻・母として「家」を切り盛りする様子が描かれる。この「三条邸」は、中納言一家が改築し移り住む矢先に、復讐のクライマックスとして、道頼に乗っ取られてしまったものである。

「三条邸」は落窪の君が伝領し、地券も手元にあったため、道頼は忠頼が改築を始めた時点で取り返すことができたが、そのようにはしなかった。「三条邸」を取り返すのが、このタイミングであったのは、妻方の父である忠頼が財を注いで改築を行ったことによって、「三条邸」に実母の「邸」であること以上の価値が生まれるからだと考えられる。「三条邸」は実家の援助の象徴になっていると考えられ、財を注いだ「邸」を忠頼が「道頼家」に提供するかたちになったことで、妻方の「家」が援助するかたちができあがったのである。

このように、母から継承し、父が改築を行った「三条邸」を手に入れることで、落窪の君に実家との結びつきが生まれることになる。これによって、落窪の君を「理想的な妻」と位置づけるための条件が揃うことがわかる。したがって、落窪の君にとって「二条邸」での暮らしは、道頼の「理想の妻」としての必要条件を手にするための期間であったと考えられる。

（四）「三条邸」時代の試練

「孝養」の舞台となるのが「三条邸」である。この「三条邸」の所有をめぐる問題を解決する際に、道頼の妻が落窪の君であることが明かされる。そして、落窪の君と道頼による孝養が始まっていく。

忠頼に対する孝養は、法華八講・七十賀の開催と、道頼の大納

言職を譲ることが挙げられる。これらをひと通り終えると、忠頼が落窪の君について「わが子ども七人あれど、かく現世、後生うれしき目見せつるやありつる。」（二八一頁）と語る様子が記される。忠頼は、この発言において、落窪の君が最も大事な子であることを明確にし、「忠頼家」の成員として認定していることがわかる。

また、この直後の場面では、忠頼が今度は道頼に対し「おのれは、おほやけもかしこくもおはしまさず。ただあが君のみこそうれしくかたじけなくおぼえたまへ。この世につかうまつらで死ぬとも、〈大方まもりともなりはべりて〉など念じはべる」（二八二頁）と発言することが記される。ここでは、道頼が最高の婿であることを明確にしていることがわかる。

そして、この場面を境として、本文では落窪の君の呼称が「女君」から「大将殿の北の方」へと変わる。つまり、忠頼が二人をそれぞれ認定することで、落窪の君は道頼の「北の方」になるのである。

「継子いじめ」の時点では、忠頼が落窪の君に対して深い愛情を抱いていないことが記され、落窪の君は「中納言家」の成員として扱われていなかったことがわかる。だからこそ、忠頼に娘として認められることが、落窪の君にとって大きな意味を持つのである。さらにこの後、道頼を婿と認定することにより、「忠頼家」の娘が「道頼家」の妻になったことが明確になる。これによって、落窪の君は道頼方の「家」からだけでなく、実家である「忠頼家」からも、正式に道頼の妻として認められるのである。

前にも引用したとおり、忠頼は道頼に対し、死後も守護するという意志を示している。これは、忠頼が婿である道頼に行うことができる最大の援助の姿勢であったと考えられる。また、この後も忠頼は、落窪の君に遺産の大部分を譲るなど、自らの意志で「道頼家」に対して援助を行っていく。「道頼家」は権勢家なので、忠頼の援助によって勢力が変化することはないようだが、この援助によって、妻方の「家」との結びつきが強くなり、結婚のかたちがより強力に成り立つことがわかる。これによって落窪の君は、「理想的な妻」として確立した存在になるのである。(3)

このように、落窪の君は道頼の妻として活躍していくが、三人の息子と二人の娘を持つことが記され、「孝養」では、この子ども達の成長や優れた様子もそれぞれ描かれていく。ここから、落窪の君の母としての一面も見ることができる。中でも娘の大君は、入内後に中宮になることが記され、このような娘を育てたという点から、結果として、落窪の君の母としての力が間接的に描かれていると意味付けることもできる。

落窪の君は「継子いじめ」「復讐」を通して、継母および道頼の母と、二人の「母」から試練を受ける。そして、「孝養」においては、自らが妻・母として活躍していく。また、この舞台となる「三条邸」は実母から譲り受けた「邸」でもあり、落窪の君は、

ここで実力を発揮することで、忠頼から正式な承認を受けることがわかる。つまり「孝養」においては、落窪の君が「理想的な妻」になるための最終条件である「実家との繋がり」を取得することが試練となっており、それは、実母が亡くなったと同時に消失したのであろう「中納言家」での成員の座を取り戻すという、亡き実母が与えた試練とも考えることができる。

このように、「継子いじめ」では、落窪の君が逆境の中で「理想的な妻」に必要な能力を身に付けること、「復讐」では、道頼の母による承認と「三条邸」の取得により、「理想的な妻」に必要な条件を揃えること、そして「孝養」においては、忠頼の承認によって、落窪の君が「道頼家」の「理想的な妻・母」として確立した存在になることがわかる。『落窪物語』では、このような構図によって、落窪の君の北の方としての地位の確立の過程が描かれていくのである。

二　阿漕をめぐる活躍の構図

（一）阿漕の変化

阿漕は、落窪の君の実母の在世中から仕える人物である。中納言邸においては落窪の君の唯一の味方であり、親身に世話をする様子が描かれるが、「復讐」に入ると、道頼の暴力に加担していく。落窪の君のための復讐と考えれば矛盾はしないが、落窪の君は復讐に否定的なので、「復讐」における阿漕は、落窪の君よりも道頼に従っていると考えることができる。物語が進むにつれて、道頼の阿漕に対する信頼の厚さが強調されていき、落窪の君との結びつきよりも、道頼との主従関係のほうが強化されていくのである。

物語の冒頭から女童として落窪の君に仕える阿漕は、大人になり衛門と呼ばれることが記される。そしてその後も女房として出世し、内侍となることや、最終的には女官の名誉職である典侍にまで至ることが記され、『落窪物語』は、落窪の君の物語であると共に、阿漕の一代記のようにもなっていることがわかる。ここからは、この阿漕の変化や位置づけについて考察していきたい。

同じように主人に仕える女房であっても、単なる女房はサラリーマン的であり、利害や打算によって主人を変えることができたようである。『落窪物語』においても、落ち目になった主人（中納言家）から、他の主人のもとへ移る女房達が描かれている。一方、乳母は終身であり、主人（養い君）がどのような状況であっても決して裏切らず、盛衰を共にしていたようである。[4] これが、単なる女房と乳母の相違点である。

乳母の活躍は、物語において親（特に実母）不在の場合に顕著であり、継子いじめの話型であっても、乳母がしっかりしている間はいじめが始まらないというかたちがパターン化されているようである。しかし『落窪物語』では、姫君に実母も乳母もないことが記され、冒頭から継子いじめが行われている。そしてその代

わりに、身の回りの世話をする阿漕が紹介される。ここで阿漕は乳母子に近い役割を担っていたと考えられるが、乳母子ではなく女童であることが明確にされている。

乳母子は、乳母の性格を受け継いでおり、物語においては、養い君の恋の仲立ちや秘密保持の役割を担っている。このような乳母子と養い君は運命共同体とも言え、主従関係を越えた強い絆で結ばれていることがわかる。阿漕と落窪の君の仲も、「あはれに思ひかはして、片時離れず」（一八頁）と描写され、落ち目の状況であっても、阿漕が落窪の君を慕い、尽くす様子が描かれる。

また、『落窪物語』においては、道頼と帯刀が養い君と乳母子の関係に当たる。帯刀は阿漕の夫でもあり、ここから落窪の君との仲介役を担うことになる。落窪の君の救出や復讐の場面においても活躍が描かれるが、帯刀のミスによって継母に秘密がばれてしまうなど、少し頼りない人物としても描かれている。

物語において乳母子は、乳母が不在となった際などに、その役割を引き受ける役目がある。しかし、乳母子だけではその役割を十分にカバーできず、少し頼りない描かれ方がされるようである。道頼の場合、乳母は健在であるが、帯刀はこのような典型的な乳母子の性格を受け継いでいると考えられる。乳母子と養い君の関係は前述したとおりであるが、帯刀も物語において、一貫して道頼に従う様子が描かれている。

このように、典型的な乳母子である帯刀は道頼と、女童である阿漕は落窪の君と、それぞれ強い絆で結ばれていることがわかる。帯刀も阿漕も、主人に対して特別な思い入れを持ち、親身に仕える様子が描かれるが、それでは、阿漕のみが女童とされる意図は、どのようなものなのだろうか。

「復讐」に入ると、帯刀と阿漕の相違が目立ってくることがわかる。常に道頼に従う帯刀に対して、阿漕は落窪の君の意思を無視して行動するからである。

落窪の君は、復讐を喜び道頼の肩をもつ阿漕に「いと心づきなかりける。わが人にはあらで、君の人になりね。」（二一〇頁）と発言する。すると、阿漕は「さは、衛門、わが君につかうまつらむ。衛門が思ひし限りのことをせさせたまへば、げに御前よりも宝の君となむ思ひたてまつる」（同）と答え、落窪の君の不機嫌を気に留めないことがわかる。この場面では、念願の復讐を果たした喜びに浮き立つ阿漕と、その様子に機嫌を損ねる落窪の君が対照的に描かれている。

「継子いじめ」においても落窪の君が機嫌を損ねる場面があるが、この際には、阿漕が「「……一人おはしまさむを思うたまへて、をかしき御供にも参りはべらずなりにしかひなく、かかることを聞かせたまはず、便なき御けしきならば、さぶらはむもいとほしうはべり。いづちもいづちもまかりなむ」とてうち泣けば」（四四頁）と、必死に落窪の君に訴える様子が描かれ、これによって二人の関係が修復することがわかる。

引用した阿漕の発言は、どちらも落窪の君付きの女房あるいは女童をやめるという内容であるが、前者と後者とでは、阿漕の姿勢が全く異なっていることがわかる。同じ内容を引き合いとしながらも、「継子いじめ」においては本気の気持ちを示すため、「復讐」においては軽くあしらう態度から出た発言となっているのである。ここから阿漕の変化を読み取ることができる。

また、復讐を悲しむ落窪の君とは対照的に、これを喜び楽しむ描写がされることからも、阿漕が落窪の君のために復讐に加担しているのではないことがわかる。したがって、「復讐」における阿漕は、乳母子的な役割は担っておらず、都合によって主人を変えるサラリーマン的な女房性が見えてくると言える。つまり阿漕の変化は、乳母子的性格からサラリーマン的な女房の性格へと変わることなのである。

（二）阿漕の活躍――「道頼家」の女房として

阿漕には、物語を通して二度の活躍があることがわかる。「第一の活躍」は、「継子いじめ」において落窪の君の援助をすること、「第二の活躍」は、「復讐」において道頼の復讐に加担することである。

まず、阿漕が女童として機転を利かせる「第一の活躍」は、帯刀を通して道頼に落窪の君の存在を知らせること、道頼との結婚準備を首尾よく整えること、典薬助から落窪の君を守り抜くこと、落窪の君の救出に携わることなどが挙げられる。この他にも、継母から落窪の君をかばい、時には助言をする様子が描かれるなど、ここでは乳母子同様の役割を担い、落窪の君との強い結びつきが描かれている。

一方、「復讐」で「衛門、わが君につかうまつらむ。」（二一〇頁）と道頼に仕えることを宣言すると、阿漕の「第二の活躍」が始まっていく。

〔中納言家の引越しを探る〕

阿漕は、中納言一家が「三条邸」へ引っ越すことを知り、道頼に相談する。そして「渡らむ日をたしかに案内して来」（二一三頁）と依頼を受ける。

ここでは、落窪の君が復讐を制止するが、「男君、「物な申しそ、ここには心もおはせず。御為あしき人は『いとあはれなり』とのたまへば、わが身さいなまるるかし」とて、笑ひたまへば、衛門心得て、いかが申すべき。」（二一四頁）と、かえって道頼と阿漕の結束が強くなることがわかる。そしてこの後、落窪の君の制止を無視し、中納言家に引越し日を問い合わせる阿漕が描かれる。

〔女房を集める〕

阿漕が引越し日を報告すると、今度は「若き人々いま少し求め設けよ。かの中納言のもとによろしき者はありきや。それもとかくも言はで呼び取れ。」（二一四頁）と命を受ける。

この際、阿漕が復讐を喜ぶ様子が描かれ、「わが心に似て。

いと聞かせじ」（二一四頁）という道頼の心情が記される。そして、「ささめきありきたまふ。」（二一五頁）と、落窪の君に知られないよう復讐の計画を練る阿漕と道頼の様子が描かれる。

この後、阿漕が中納言邸の女房を引き抜く様子が記されるが、この新参女房は、落窪の君ではなく道頼が品定めをすることになる。落窪の君は「あつけにや、悩ましうて見たまはねば」（二一六頁）と記述があり、そのため道頼が出てくることがわかるが、ここで品定めをするのが道頼であることによって、阿漕と道頼の繋がりが強調されることがわかる。

ここでは、道頼の「衛門が導きなれば、足らはぬことありとも、言ふべきにあらず」（二一七頁）、「いとおぼえ強しや」（同）などの発言から、阿漕への信頼の厚さを読み取ることができる。また、このように道頼と話す阿漕を見て、女房達も「この殿にはかくめでたきおぼえにては候ひたまひけるぞ」（同）と驚く描写がされる。

〔継母に鏡箱を返す〕

道頼家が「三条邸」に転居した後、邸に残る中納言家の荷物を返却することになる。中納言家の息子・越前守が「三条邸」に訪れた際、道頼が返却する荷物と共に、鏡箱を持たせるよう阿漕に言い（「かのむかしの古蓋の鏡の箱はありや。これに添へて返したまへかし。」二三〇頁）、これを機に種明かしが始まっていく。

この鏡箱の返却は、「継子いじめ」における継母とのやりとりと呼応している。これは、落窪の君の鏡箱を強要するもので、継母は、これを取り上げる代わりに「古めきまどひて所どころはげたる」（七四頁）鏡箱を落窪の君によこすことが記される。このいじめの一部始終を、阿漕だけではなく道頼も見ていたことから、この鏡箱が今回の種明かしに使用されるのである。

阿漕は、この案を面白がり、鏡箱を取り出すと、落窪の君に歌を書くよう勧める。そして、これによって中納言家の人々は、道頼の妻が落窪の君であることを悟ることになる。種明かしは道頼と阿漕が連係して行い、ここでは、道頼の意図を瞬時に理解し、機転を利かせる阿漕像を読み取ることができる。

このように、「第一の活躍」が落窪の君との結びつきを強調していたのに対し、「第二の活躍」においては、阿漕と道頼との結びつきが強調されていくことがわかる。阿漕の変化は乳母子の性格を持つ女童からサラリーマン的な女房への変容であると結論付けたが、阿漕の二度の活躍を踏まえると、この変化は道頼との結びつきと関係していることがわかる。

落窪の君を救出し、「二条邸」に移り住んだ直後（「復讐」の冒頭）に、道頼が「あこぎ、おとなになりね。」（一四三頁）と発言する箇所がある。阿漕は、この時点まで女童であり、この発言によって一人前の女房となるのである。

しかし阿漕は、物語の冒頭で帯刀との結婚が記されるので、その後も女童として扱われていたのは不自然だったと考えられる。だからこそ、阿漕にとって「おとな」になることは、特別な意味を持つのである。

つまり、「継子いじめ」と「復讐」を境に見られる阿漕の二面性は、女童から一人前の女房へと成長したことがきっかけになっていると考えられる。そして、「おとな」と認定したのが道頼であったことが、以後の道頼との結びつきにも関わっていくのである。

道頼の認定によって「おとな」となった阿漕は、サラリーマン的な性格を身に付けた一人前の女房として「道頼家」に仕えていくことがわかる。落窪の君付きの女房であることに変わりはないものの、「道頼家」の女房として、「家」の主人である道頼との結びつきが重要になっていったのである。つまり阿漕は、女童として「第一の活躍」をする時点では、「家」に縛られないからこそ、権力者の意思に関わりなく、まさに「後見」（一八頁）として落窪の君に尽くすことができたが、「おとな」になり「家」に属す女房となったことで、その距離感が変化したのである。

このように、阿漕の変化は、「家」に縛られない女童から「家」に仕える女房へと成長することにより生じたものである。「家」の女房として「第二の活躍」をする阿漕は、ここから「家」の主人である道頼の信頼を勝ち取り、女房として出世することがわかる。阿漕が女房として成功を収めるためには、落窪の君の認知だけではなく、「家」の主人である道頼の認定こそが不可欠だったのだと考えられる。このようにして、阿漕の「一代記」は描かれていくのである。

終わりに

最後に、これまで本稿で述べてきたことを簡潔に振り返り、まとめておきたい。

まずはじめに、落窪の君が「邸」の移動にともなって試練を乗り越え、最終的には「道頼家」の北の方として正式に承認されることを考察した。次に、女童であった阿漕が、道頼の認定を受けることで「道頼家」に属す女房となり、出世していくことを考察した。

ここから、「道頼家」に属すことで、落窪の君も阿漕もそれぞれ一人前の北の方・女房としてひとり立ちし、立場を確立させていくことがわかる。つまり『落窪物語』には、二つの立場の女性が、それぞれ「家」の一員として確立する過程が描かれているのである。

しかし、それだけではなく、最終段階においては「家」の枠組みを超えて、後宮において枢要をなす落窪の君と阿漕が描かれていく。落窪の君の娘である大君は、入内後に「御女の女御、后のゐたまひぬ。」（三四〇頁）と記される。また、落窪の君は「落窪

に単の御袴のほどは、〈かく太政大臣の御北の方、后の母〉と見えたまはざりき」（三四一頁）と噂をされる描写がされ、「中宮の母」という位置づけが強調される。中宮は後宮の中でもトップの位であり、その中宮の母である落窪の君を、「家」の枠組みを超えた、「後宮」レベルにおける重要な存在として位置づけることもできる。

一方阿漕も、物語の最後に典侍に出世することが記される（「むかしのあこぎ、今は内侍のすけになるべし。「典侍は二百まで生ける」とかや。」三四三頁）。典侍は女官として実質的には最高の職であるため、こちらも「家」の枠組みを超え、「後宮」レベルの女房として位置づけることができる。

このように、落窪の君と阿漕は単なる「家」を越えて、「後宮」においても重んじられる人物へと成長を遂げていく。「継子いじめ」においては強い絆で結ばれ、お互いに依存していた落窪の君と阿漕の結びつきが、物語が進むにつれて薄れていく印象を受けるのは、それぞれが自分の道を突き進み、一人前に成長するからなのである。あるいは、阿漕が道頼の方へと接近することや、この阿漕に落窪の君自身も主替えを言い渡すことが、当人達の意図ではないにしろ、結果としてそれぞれの精神的自立や成長を促していたのだとも考えられる。

このように、「復讐」「孝養」部分にも目を向けることにより、『落窪物語』を単なる継子いじめ譚から抜け出た、一対の姫君と女房の成長・出世譚として読むことができるのである。

注1　「家」については、服藤早苗『平安朝の家と女性―北政所の成立―』（平凡社　平成九年）、『平安朝の母と子―貴族と庶民の家族生活史―』（中央公論社　平成三年）を参考にした。

2　テキストには、『新編日本古典文学全集』を用いた。

3　畑恵里子「継子による家の獲得」（『王朝物語と力―落窪物語からの視座―』新典社　平成二三年）では、縫製能力によって落窪の君が妻として道頼方の親に認められ、貴族社会での位置づけを手に入れるとされる。しかし本稿では、それに加え、実家との繋がりも、妻としての確立（貴族社会での位置づけ）に必要な条件として考える。

4　女房や乳母、乳母子の位置づけについては、吉海直人『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』（世界思想社　平成七年）を参考にした。

〈いのうえ　まりこ／二〇一二年日本語・日本文学科卒〉